

海事史研究

第 76 号

2019年11月

移民船とメディアによる南米東岸諸都市の「対岸化」

—— 大大阪と大サンパウロのグローバルな並行的発展を事例に——

.....根川 幸男 (1)

阿賀野川と信濃川の川船について——『古来船舶調書』から——

.....影山 和則 (32)

三浦按針の「鬢髪出土」の誤報に対する指摘

—— 明治三十八年『時事新報』の発掘調査報告より——

.....鈴木かほる (50)

脇舵とはなんぞ —— 中国の舵・日本の舵 ——

.....安達 裕之 (57)

会 務 記 事 (95)

日本海事史学会

海
事
史
研
究

第
七
六
号

二
〇
一
九
年

KAIJI SHI KENKYU

Journal of the Japan Society for Nautical Research

No. 76, November, 2019

ARTICLES

Sachio NEGAWA, “Transoceanic conscientization” of the South American cities
on the east coast through the emigrant vessels and media:

In case of the parallel development of the Greater Osaka
and Greater São Paulo on the global periphery.

..... (1)

Kazunori KAGEYAMA, River boats on the Agano River and the Shinano River.

..... (32)

Hiroyuki ADACHI, Rudder and Steering-oar in China and Japan.

..... (57)

ESSAY

Kahoru SUZUKI, Pointing out the misinformation

about Miura Anjin’s “Excavation of hair”

— From the excavation report of the “*Jiji Shinpo*”
in the 38th year of Meiji —

..... (50)

REPORT OF THE SOCIETY (95)

The Japan Society for Nautical Research

c/o Japan Maritime Public Relations Center

2-12-6 Minato, Chuo-ku, Tokyo, 104-0043, JAPAN

ISSN 0386-9105

三浦按針の「鬢髪出土」の誤報に対する指摘

——明治三十八年『時事新報』の発掘調査報告より——

鈴木 かほる

はじめに

横須賀市西逸見町塚山公園の安針塚に、徳川家康の外交顧問・ウイリアム・アダムズ（日本名三浦按針、以下三浦按針と記す）夫妻の宝篋印塔二基があり、国史跡となつてゐる。三浦郡逸見村は三浦按針の旧領である。

三浦按針墓の発掘調査は明治三十八年（一九〇五）五月、英国公使・神奈川県知事らの立ち合いのもと、三日間に亘る大掛かりな調査が行われ、その結果、墓下からは遺骨・遺髪・遺物など、何一つ証跡となるものは出土しなかったことが判明し、その速報は『時事新報』に報じられている。

ところが、この発掘調査から一世紀有余年を経た二〇一九年五月、西逸見町の三浦按針の菩提寺浄土寺の住職が横須賀市役所を訪れ、明治三十八年の安針塚の発掘調査で、墓下から三浦按針の鬢髪・遺物が出土し、按針の墓であると認定されたと記された書物「安針塚修理及保存ノ概要」を

発見し、これを横須賀市が記者発表したという、驚愕な報道が目飛び込んだ。その書物とは、のちの大正一〇年（一九二一）二月一日に記録したもので、横須賀市は裏付けをとらず公表したものである。同書の内容とその誤謬については、すでに一部の研究者によつて共有されており、今日の新聞では無い。無論、同寺には、鬢髪も、遺物も存在しない。そもそも頭髪と鬢髪を一意的に区別できるものなのか。

この「三浦按針の鬢髪出土」の誤謬は、五月一〇日付で共同通信社より全国二三社に配信され、神奈川県内では『日経新聞』『朝日新聞』『毎日新聞』『神奈川新聞』『東京新聞』『タウンニュース横須賀版』などに一様に掲載され、インターネット上にも公開されている。公共機関が公表したことにより事実化し、史学専門部門までもがホームページで紹介しており、今後、さらに拡散が懸念される。これが事実化すれば、長崎県平戸市の三浦按針の墓地から西洋

人の人骨が出土したと発表されたことや、大分県臼杵市や静岡県伊東市、さらに三浦按針の母国イギリスにとつても、この基礎的情報の誤謬は三浦按針の研究上、極めて危険である。

この件については、横須賀市文化財専門審議会の前委員長・上杉孝良氏も横須賀市に抗議したものの、このまま放置して置けば、後世、再び新発見といつて繰り返される可能性は否定できない。そこで正しい情報を書き残しておく義務があると考え、この紙面を頂いたものである。

『時事新報』による発掘報告

『時事新報』による発掘報告

まずは、当時の発掘情報を伝えた『時事新報』を紹介し、ここに確認しておきたい。三浦按針墓下の発掘調査は、明治三十八年五月二三日から三日間に亘つて実施されている。当時は「発掘調査報告書」なるものを作成しなかった時代であつたから、二四日付（写真1上）、二五日付（写真1下）、二六日付（写真2上）、二八

横須賀按針塚と英公使

二十三日午前十時五十分、横須賀市役所にて英公使マクドナルド氏同夫人は、周布神奈川縣知事、岡田通譯官及び横濱居留醫師ウイラー英一等館主アームスウオーター同バー等諸氏と共に當地に來り今より殆ど三百年前徳川家康將軍の時我國に渡來して墓に横須賀の土となりたる有名な英國按針ウイリアム・アダムズを葬りたりと傳へらる。按針塚が果してアダムズの墳墓なるや否やを究めんとす。其發掘に取掛りたるが未だ其目的を達するに至らず周布知事及び英國公使同夫人は午後二時五十分發掘車にて一先づ歸り去りたり

故に予が死したる後は遺骸を埋むるに江戸城を望み得らるべき地即ち予が領地たる逸見の山頂を以てせよと遺言し元和六年四月四日遂に歿せり是に於て妻馬籠氏は遺言を奉じてアダムズを用ひ其身も寛永十一年七月十六日病死しアダムズと同所に葬られたるが土地の人民何時ぞなく同所を按針塚と唱へ以て今日に至れるなりと其塚の所積二百四十坪周囲の鐵柵開口二間三尺奥行三間三尺なるが今同之を發掘し果してアダムズを葬りたるを確かめたる上は大地を起し修繕を加へてアダムズの功績を後世に顕表せんとするの計畫あり昨日英國公使、神奈川縣知事其他の實地臨檢をなしたるは之が爲めなりと云ふ

写真1 『時事新報』

田通訳官及び横浜居留醫師ウィ
ラー、英一番館主ジェーム・ス
ウォーター、同ペーシ等、諸氏
と共に当地に來り、今より殆ど
三百年前、徳川家康將軍の時、
我國に渡來して、遂に横須賀の
土となりたる有名な英国按針
ウイリヤム アダムスを葬りた
りと伝へらる、安針塚が、果し
てアダムスの墳墓なるや否やを
究めん為め、其発掘に取掛りた
るが、未だ、其目的を達するに
至らず、周布知事、及び英国公
使、同夫人は午後二時五十分
發、汽車にて一先づ歸り去りた
り

五月二五日付「安針塚の由来」(三浦按針の履歷を記した
前半を省略)

(前略) 予が死したる後は、遺骸を埋むるに江戸城を
望み得らるべき地、即ち予が領地たる逸見の山頂を以
てせよと遺言し、元和六年四月四日遂に没せり、是に
於て妻馬籠氏は遺言を奉じてアダムスを弔ひ、其身も

按針塚發掘繼續
(横須賀二十五日電)
去る二十三日より引續き發掘中なる按針
塚に就きては其後坪井博士出張する筈な
りしが渡支ありて大學教授柴田杖英氏出
張鑑定の上荷は發掘を繼續し居れども未
だ充分なる證據を得る能はずと云ふ

○按針塚發掘後報 過日來發掘を
繼續し居れる按針塚は二十六日も坪井
博士周布神奈川縣知事井上神奈川縣警務
長石川三浦郡長鈴木横須賀町長及び横濱
居住英國人ジェームス ウォーター氏等
立會ひ發掘を繼續したるが未だ其確なる
證據を得る能はざれども土地の状態と
古老の云ふ所及び其當時肥前國平戸に駐
在せし英國領事コックスと云へる人の著
せしアダムスの履歷書に依り坪井博士は
正にアダムスの古墳に相違なしと鑑定を
下し尙ほ大學に歸りて後篤と研究したる
上其意見を發表するふとなりしを以て
周布知事及びウォーター氏等は今後廣く
寄附金を募集して一大紀念碑を建立し以
てアダムスの功績を頌表する筈なりと
(横須賀電)

写真2 「時事新報」

を後世に頌表せんとするの計畫あり、昨日、英国公使、
神奈川縣知事其他の実地臨検をなしたるは之が為なり
と云ふ

五月二六日付「安針塚發掘繼續」(横須賀二十五日電)
去る二十三日より、引續き發掘中なる安針塚に就きて
は、其後、坪井博士出張する筈なりしが差支ありて、
大學教授柴田杖英氏出張鑑定の上、尚ほ發掘を繼續し
居れども、未だ充分なる證據を得る能はずと云ふ

五月二八日付「安針塚發掘後報」

過日來、發掘を繼續し居れる安針塚は、二十六日も坪
井博士、周布神奈川縣知事、井上神奈川縣警務長、石
川三浦郡長、鈴木横須賀町長、及び横濱居住英國人ジ
ェームス ウォーター氏等立會ひ、發掘を繼續したる
が、未だ其確なる證據を得る能はざれども、土地の
状態と古老の云ふ所、及び其當時、肥前國平戸に駐在
せし英國領事コックスと云へる人の著せしアダムスの
履歷書に依り、坪井博士は正にアダムスの古墳に相違
なしと鑑定を下し、尚ほ大學に歸りて後、篤と研究し
たる上、其意見を發表する事となりしを以て、周布知
事及びウォーター氏等は、今後、広く寄附金を募集し
て一大紀念碑を建立し、以てアダムスの功績を頌表す
る筈なりと(横須賀電話)

以上、三日間の記事を要約すると、

安針塚は、三浦按針の遺骸を葬った墳墓なのか否かを
究めた上で墓に修繕し、その功績を後世に頌表しようと
いう計画があつた。英国公使マクドナルド氏・同夫人、
神奈川縣知事周布公平氏らが実地臨検をしたのはそのた
めである。ほかに岡田通訳官、横浜居留醫師ウィラー氏、
英一番館主ジェームス・ウォーター氏、同ペーシ氏、神
奈川縣警務長井上氏、三浦郡長石川疏氏、横須賀町長鈴
木氏らの立ち合いのもとに、大學教授柴田杖英氏、坪井
博士が発掘鑑定に取り掛かった。しかし、三日間繼續し
たものの、何一つ決定すべき証跡は得られず、ついに目
的を達するに至らなかつた。

しかし、坪井博士は、土地の状態、古老の伝え、平戸
に駐在していたイギリス商館長コックスが著したアダム
スの履歷などにより、三浦按針の墓として建てられたも
のと鑑定したが、なお研究した上で県知事及びウォータ
ー氏は、広く寄附金を募集して一大紀念碑を建立し、
彼の功績を頌表することになった、

と理解される。その頌表碑の一基は、表面に「ウイリア
ム・アダムス夫妻の墳墓在於塚山絶頂」と刻み、裏面に
「明治三十八年有志者胥謀欲修理墳墓茲竣工因建此標石、
明治四三年五月、神奈川縣知事男爵周布公平、大不列顛特

命全権大使ゼ、ライト、オノラブル、サー、クロード、エム、マクドナルド」と刻む標石であり、もう一基は井上馨篆額、三島毅撰文、高島張輔書によって大正三年一〇月に建てられた「安鍼塚碑」である。

三浦按針は、五七歳を一期に一六二〇年五月六日（元和六年四月二四日）に死去している。『三浦古尋録』（文化九年刊）及び『新編相模国風土記稿』（天保二年刊）によれば、遺言により江戸を一望できる、この逸見村の高敞の地に葬られたと記しているが、この明治三十八年の発掘によって、これは口碑であることが明確となったのである。このことは、すでに大正六年の加藤三吾著『三浦の按針』（六〇―六一頁）、昭和十五年の幸田成友著『史話東と西』（六〇―六一頁）、昭和五十九年の岡田章雄著『三浦按針』（二九二頁）によって紹介されている。

そもそも、三浦按針夫妻の宝篋印塔は、子ジョセフが按針の死から一四年後の寛永一一年（一六三四）七月一六日の生母の死を機会に建立した供養塔であり、明治二五年の時点、三浦按針夫妻の墓碑に「壽量満院善瑞居士、妻馬込ゆきの墓に「海華王院妙満比丘尼」と刻んだ戒名を読むことができたが、凝灰岩ゆえ四世紀を経た今、刻銘されていた形跡さえない。墓前の石燈籠一対は、建立から一六〇余を経た寛政一〇年（一七九八）二月、江戸按針町の人々

が奉納したものである。日本橋按針町に「三浦按針邸跡」という記念碑が建てられたのは、昭和五年のことである。

逸見村の三浦按針墓について明治三三年二月、ドクトル・ルード・キヒ、リース氏が、三浦按針上陸三百年を記念し、横浜において「キリアム、アダムスと逸見に於ける彼の墳墓」と題し、講演されている。明治三十八年の安針塚発掘の五年前である。リース氏はドイツのユダヤ系の科学的歴史学者で、東京帝国大学史学科講師として招聘され、一八八九年の史学会創設を指導した人物である。その講演の内容は『史学雑誌』第一三編六号に掲載されており、そのなかで、リース氏は次のように考証している。

（前略）抑々遺骸が、平戸より逸見に転送されたるに非ざるは論なし、季節は決して、その然るを許さず、彼れが死せるは梅雨の候なればなり。然らば、当時、日本に行はれたる塩漬（木乃伊の一種）となし送りしや、これ又断じてあるべからず、何となれば、木乃伊は地中にこそ変化を受けざれ、船中又は陸運にては、到底その效なければなり。殊に暫く哀運に赴きて、殆んど世界とも交通を絶ちたる在平戸英商館当時の状況により推測するも、遺骸転送の事、全く信するに足らずといふも不可ならんか。然らば、火葬して茶毘の灰を送りたるには非ざるかとの疑起らんも、これ又、

耶蘇教徒としての英人の感情より、断じて然ることなしといふを得べし（後略）

氏によれば、三浦按針が没したのは梅雨の時期であるから、平戸から逸見村への遺骸転送説は成立しがたい。塩漬けてミイラの状態にして送ることは、地中こそ変化しないのであるから、海運・陸運で送ることも断じてない。当時、殆ど交通を絶っていた在平戸商館の状況からみても、遺骸転送は不可である。また耶蘇教徒は土葬であるから、当時の英人の感情として茶毘に付すことは断じてない、遺骸転送説は成立しがたいと述べている。

三浦按針は平戸で死去したことは『バーチャス廻国記』によって知られる。平戸商館長リチャード・コックスは、その日記『イギリス商館長日記』に、一六二一年二月二八日江戸に参府し、三浦按針の遺子ジョセフとスザンナを訪ね、「予は（アダムス）の遺言により、其刀及脇差を其子ジョセフに渡したるに、涙を以て授受せり」と記している（同日条）。ジョセフに遺骸もしくは茶毘の灰を渡したとすれば、コックスはそうのように記したはずである。

『イギリス商館長日記』には三浦按針の埋葬地を記していないが、一六二〇年一二月六日条に「昨晚（平戸商館の事務長助手が）この世を去って、今日、我々の通常の埋葬地に埋められた」と記している。この「通常の埋葬地」と

は、イギリス商館附属の平戸遠見山の外人墓地（平戸市崎方町）である。三浦按針の埋葬記事を記していないのは、イギリス商館員は、そこに埋葬することが当然であったからと考えられる。

おわりに

以上、『時事新報』を紹介し、明治三十八年三浦按針墓から何一つその証跡となるものが出土しなかった結果を確認し、三浦按針の菩提寺浄土寺に存在する大正一〇年刊「按針塚修理及保存ノ概要」に書かれた「鬚髪・遺物出土」いう記事が誤謬であることを指摘した。

註

（一）『日経新聞』二〇一九年五月一日付夕刊、『朝日新聞』同年五月一三日付の地方版、『タウンニュース横須賀版』同年五月一七号、『神奈川新聞』同年五月九日付、『毎日新聞』同年五月三十一日付の地方版、『東京新聞』同年五月一九日付神奈川版ほか。

（二）東海大学湘南キャンパス教育研究所。

（三）『長崎新聞』二〇一九年四月二日付「長崎県平戸市は一〇日、平戸市崎方公園内の「三浦按針墓」で出土した人骨について、ヨーロッパ人男性と断定したことを明らかにした。平戸市は、徳川家康の外交顧問を務めた英国人ウイリアム・

アダムス（日本名・三浦按針）の可能性が高いとみている。平戸市は二〇一七年に墓地の発掘調査を実施。頭蓋骨など複数の骨片が入ったつぼが見つかり、山口県の人PO法人「人類学研究機構」に骨の鑑定を依頼していた。鑑定では、骨の残存状態が悪いため個人の特定に必要な核DNAの抽出を断念。母から子に受け継がれ祖先をたどることができるミトコンドリアDNAを分析した結果、日本人には見られず北・西ヨーロッパ人に多い「ハプロタイプH1」と呼ばれる塩基配列を確認した。このほか骨に含まれるコラーゲンを抽出し、炭素成分を年代測定。一五九〇年から一六二〇年に死亡した可能性が高いと分かった。按針は一六二〇年に死去している。平戸市によると、一五六一年から一六四〇年までに平戸で死亡した外国人は計約七〇人。このうち一五九〇年から一六二〇年に死亡したのは按針を含む英国人とオランダ人の計一〇人だった。平戸市は今後、墓地を再調査し、西洋風の長方形をした墓の遺構が残っていないか確認する方針。按針の子孫も捜しているが有力な情報は得られておらず、「今後多くの研究者らの協力を得ながら調査を進めたい」としている。

(4) 岡田章雄『三浦按針』一九九四年、二七五頁。
 (5) 菅沼貞風『大日本商業史』八尾書店、明治三十五年、三八九頁。
 (6) 上杉孝良氏の提供による。
 (7) Purchas His Pilgrimes グラスゴウ版、第二巻、三四六頁。
 『慶元イギリス書翰』一〇五頁。一六二〇年二月一日付リチャード・コックスのイギリス東インド会社宛書状。
 (国家公務員特別職)

脇舵とはなんぞ

中国の舵・日本の舵

はじめに

一 正舵と替舵

二 三副舵と脇舵

おわりに

はじめに

元暦二年（一一八五）二月、平家一門の拠る屋島攻撃のために摂津の渡辺で開かれた軍議の席上、源義経と梶原景季は逆櫓をめぐる激しく言い争った。「さかるとはなんぞ」と義経の問に対して、景季は次のように答えた。⁽¹⁾

馬はかけんとおもへば弓手へも馬手へもまはしやすし、舟はきとをしもどすが大事に候、ともへに櫓をたてちがへ、わいかちをいれて、どなたへもやすうをすやうにし候ばや

逆櫓は有名な故事だけに、明治二十七年（一八八四）の近藤真琴以来、明治二八年の三田村熊之介を例外として、逆櫓を

安達裕之

立項しない国語辞典はないと言って過言ではない。ところが、脇舵はいささか趣を異にする。明治二年の高橋五郎を除けば、大正八年（一九一九）の上田萬年・松井簡治まで脇舵が国語辞典に立項されることはなかったからである。

高橋が和漢洋三字者の用に供するために編纂した和漢英辞典は、「我国ノ大ウエブストルト為スノ日アラン事ヲ期」した野心作で、漢語と英語の類語を列記した横組みの国語辞典として名高い。高橋が付けた語釈は、こうである。⁽²⁾

わいぢぢ(名) 脇舵、わぎぢぢ(船の傍の櫓) Side-oars.

七ヶ月後、英語の類語を省き、不必要な語を略し、凡三〇〇〇語を補充して、縦組みに改めて高橋が世に問うた和漢辞典の語釈は、単に英語の類語を省いたに過ぎないため、これだけを読めば、漢語の言い換えと錯覚しかねず、追隨者が出なかったのも故なしとしない。しかし、英語の類語がSide-oarsではなくSide-oarsであることは銘記されてよい。和漢英辞典の櫓の語釈は